RIPPLE SAILING CLUB

月刊　No.48

RIPPLE

1986.9.15

【発行】　¥500
リプル・セイリングクラブ
〒238-03
神奈川県横須賀市長井　2－11－1
☎ 0468－57－1711

住所が変りました。

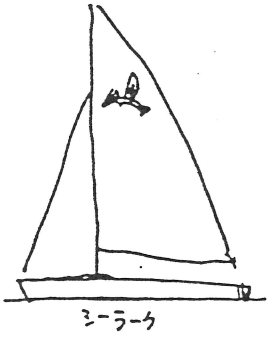
リプルの住所が変ったのに気付きました？
もちろん場所は前と同じです。当然ですけど。
区画整理があったのです。

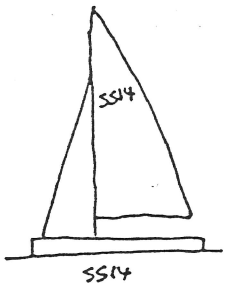
旧住所　〒238－03
神奈川県横須賀市長井町長浜3872
↓　↓　↓　↓
新住所　〒238－03
神奈川県横須賀市長井　2－11－1

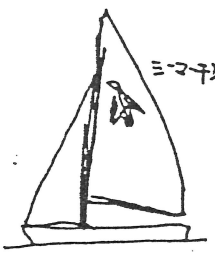
当　両方とも通用するそうですので、同題無いと思いますが、よろしくおねがいします。
なを、電話番号、振込み先の口座番号はいままでのとうりです。

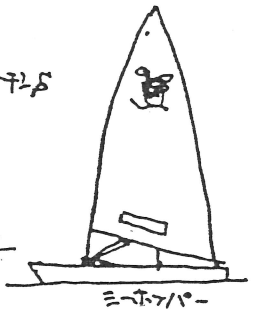
ナハマエリアオープン ヨットレース

9月7日、レーザー長浜フリート主催による長浜エリアオープンヨットレースがおこなわれた。この春から始まったこのシリーズ、海上エントリー、参加無料と、とても気軽に参加でき、又、そのレベルも高いので、中、上級者の腕だめしにはもってこいのレースである。フリートキャプテン桑原師ひきいるレーザー超人軍団は、“中年紳士”多賀氏、“海の狼”富松海太郎等々、いずれも全日本上位に名をつらねる連人ぞろい。レース後のバーベキュー（会費1000円）では、ルールの勉強なんかもできちゃうにちがいない。
次回はいつやるか知らないが、我と思わん方は参加されたし。









世界のヨットクラブめぐり

すべてここから始まった

ラロトンガ、と言っても聞いたことない人が多いかと思う。
ニュージーランドから北東へ、ヨットで10日ほど行ったところにあり、映画“戦場のメリークリスマス”のロケを行った島として、その後日本でもその名が聞けたていどで、正直言って僕もそのころ知らなかったのだ。
そのロケ隊のスタッフで、いい歳をした妻子持ちが現地で行方不明になり、大島渚監督が「どうせ島の娘とイモでも掘って暮しているんでしょう。」と言って同題になったりもした。
実際、景色の良さでは、たいしたことないが、それだけに観光化されていず、土壌も肥沃で、島民達は白人の悪い影響を受けずに自分達の力でのんびりと、そしてのびのびとくらしている。彼らは人なつこく、特に我々日本人は日に焼けると肌の色も顔つきも彼らと同じになってしまうので、彼らから見ると我々は“海の彼方からやってきた兄弟”よ、ということになる。おまけに、このあたりの島々の娘達は、海から来た客人を体でもてなすというキャプテンクックの時代からの風習がいまだに忘れさられていないようでもあり、島の娘と仲良くなって、そのまま日本での生活をかなぐり捨ててしまうおじさんがいても不思議ではない。そんな南海の楽園なのだ。

とは言え、ここはニュージーランドの信託統治領である。少数であるが、白人も住んでいるわけだ。島で唯一のバーは、どうやら彼らにとっていごこちが悪いらしく、はとんど白人の姿を見かけることはない。それでは、彼らはどこで遊んでいるんだろう。と、ここでヨットクラブの登場になる。
ここ“ラロトン　ヨットクラブ”（正しい名前は忘れた）は一言で言って手作りの味だ。町はずれの海ぞいにポツンと立ったクラブハウス。レンタルバイクで乗りつけると、すぐ横にやしの実がドサッと落ちてきた。頭に当たって死ぬやつが毎年いるらしい。小さなラグーンのほとりの、手作り風クラブハウスは、1階が艇庫とシャワー、2階がバーになっている。艇庫には古臭い艇種不明のディンギーとウインドサーファーがしまってあるが、数はリプルの1／3くらいか。
バーのカウンターの中では順番で、会員がバーテンをやることになっているらしい。それでも、手つきはなれたもの。海面は狭く、またラグーンの外へでてしまうと、波が荒らすぎて乗れないのだろうし、ヨットに乗る環境としてはあまりいいとは言えないが、クラブはこの島の白人達の社交場として、機能しているようだ。まさに、欧米スタイルのヨットクラブの原点とも言えるし、おそらくオーストラリアやニュージーランドのヨットクラブはこういった形のものから始まったんだろう。会員による会員のためのクラブ。それがここ“ラロトンガヨットクラブ”だ。
我々はNORCのクラブバージーをプレゼントし彼らの大歓迎に合った事は言うまでもない。
太平洋の果ての小さな島の、小さなヨットクラブに乾杯！！

建物　☆☆
環境　☆☆☆
人情　☆☆☆☆

帰って来た太陽族

夏の夜はモテル

匿名希望の会員

その夜、僕達は葉山の海岸をウロウロしていたのであった。葉山は女が多いのだ。

２人の若い娘が、監視台のしたに座っているではないか。僕達は、ちゅーちょせずにはなしかけた。

「なにしてんの？」

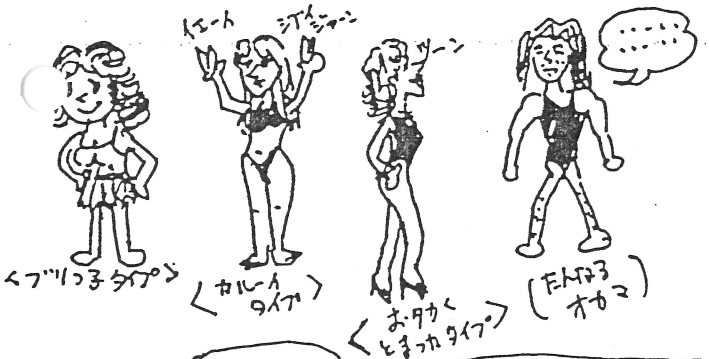
実につきなみなセリフだが、こういう場合あまり、突飛なセリフは似合わない。

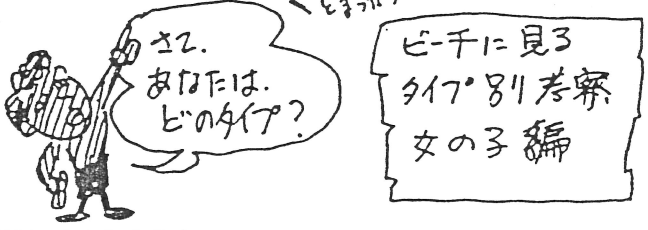
「うん、先週の日曜日にナンパされた人達と待合せてんの。」

むむっ、なんと軽い返事。僕も友人のナンパ師Ａもコカンに熱い物を感じた。

「そんなの、こないよ。僕達とどっか行こう。」

薄暗い街燈の下で彼女達は、なかなか　かわいく見えた。





「歳はいくつなの？」

「いーくつだっ。」

と、娘達はとぼける。

「　８？　１９かな？」

いう場合は多めに言っても、少めに言ってもカドが立つのを、彼らは多くのナンパ経験から知っていた。

「えーっ、１５！！」

コカンは再び熱くなった。

「うたしさー、きょうわぁ、帰らなくてもぉ、いいんだよねぇ。」

と、特にカワイイ方の１５才は、ドッキリするようなセリフを言った。

「えーっ、じゃ　どっか行こうよ。」

と、やや　どもりながら僕が言うと、

「どっか行くって、家でもあんの？」

と、１５才はマジになっているではないか。

「家はちょっとマズイけどさー」

「じゃー、行くとこ無いじゃん。」

「ホテルなんかはどう？」

と、ついつい　ニヤケた顔で言ってしまった。

「おニーサン　ダイタンだね。私達そんなコじゃないもん。」

と、１５才は、なんだか訳のわからない事を言ってはぐらかすのであった。

こんな夜中に帰らなくてもいいとか、言ってるくせに、何なんだよなっ。

と、急に、こんな夜中の海岸で、１５才をナンパしている２８才の自分にイヤケがさし、僕達は葉山の海岸をあとにした。

何も変る事なく、また夏が過ぎてゆく。

ＰＳ．秋は山中湖へテニスにいくぞ。そしてナンパだ。

いよいよ秋

ヨットのシーズンだ

９月７日、この秋一番の帆走会がひらかれた。

夏の間のうっぷんをスキッとはらしたのだ。

そこで、参加者達の走りっぷりをご紹介しよう。

この夏ヨットを始めたばかりの鈴木房江はスポーツ一家の長女。タックやジャイブはかなりよくこなしていて、見ていて危なげがない。課題はクローズホールドの走り。とにかく船をフラットに保つことに全力を集中してみてほしい。

“学生”高橋のボートスピードは目を見はるものがあった。さすが新艇、滑りが違う。新人とは言え、リプルカップでも上位に行きそう。あとは風や波の違いによるセイルシェイプの違いを、月刊リプルのバックナンバー等を見て研究していただきたい。

ミニホッパーの原村はかなりの運動神経の持ち主と見た。ボートスピードの無いのは艇の違いでしかたのないところ。ただし、フットベルトの長さを調節してもっとハイクアウトしてもらいたい。ちょうど以前の大木選手の走りのようで、こちらもＢクラス入りは時間の問題か。

シーキャップの水野／吉本組は、どうも他艇につられて上りすぎてしまうようだ。一艇だけで走っている時との違いを頭に入れて、他艇がいてもマイペース。あせらず走ってみよう。

武倉、大木、そして山本／水野組、といったところは、言うことなし。しいて言えば、ホープレスポジション、セーフリーワードポジション等を理解するため実際にスピードの違いを体験して見るいいチャンスとして、この機会を活用してほしい。

さて、来月も第一日曜は帆走会だ。来月はひとつ返出をしてみようと思っている。参加お待しています。

いよいよなるか

★通算５０号★

落書き募集

さて、この“月刊リプル”、当初は“リプル・ニュース”としてスタート。そして、いつの間にか“月刊リプル”と改名いたしましたが、いよいよ、この１１月で通算５０号を迎えます。

そこで、記念すべき第５０号では特別企画として、会員の皆様の寄せ書き特集を行いたいとおもいます。

下の応募用紙に好きなことを書いて送ってください。

キリトル

応募用紙